武田泰淳と「文化集團」（その三）

長田真紀

戦後派作家の代表的ひとりである武田泰淳が、「狐塚牛太郎」なる筆名を一時期用いていたらしいことは、知る人ぞ知る伝記的事項である。

『増補　武田泰淳全集』の別巻『増補　武田泰淳研究』（昭和五十五年三月　筑摩書房）に収録されている、古林尚氏作製の「武田泰淳年譜」は、武田年譜の定本ともいうべき年譜である。この年譜には、

昭和八年（一九三三）　二十一歳

「明日」に長篇怪奇冒険譚「世界黒色陰謀物語」の第一回ぶん約三十枚を狐塚牛太郎の筆名で書く。活字になった最初であるが、未完、中絶のまま。

となっている。

古林氏が、武田の年譜を手がけたのは、〈日本現代文學全集〉『武田泰淳・中村眞一郎集』（昭和三十九年三月　講談社）に収録したものが最初であり、その後、武田の年譜はほとんど氏が作製してきた。「経歴関係の事項については、もっぱら武田さんからの聞き書きのノートだけをたよりにした。」[1]と、古林氏が語っているように、「昭和三十八年から三十九年にかけての頃の武田さんの記憶」[2]が、年譜の土台となっている。

また、竹内好は、「座談会　武田泰淳―その仕事と人間」[3]（出席者：竹内好、佐々木基一、本多秋五、小野忍、埴谷雄高、江藤淳、堀田善衛、奥野健男、開高健、斎藤秋男）のなかで、武田泰淳の筆名が話題に上った際、次のような

発言をしている。

竹内（前略）もうひとつペンネームがある。狐崎（ママ）牛太郎かなんかなんだ。それは昔のものを見ると出て来ますよ。

江藤　どういうものをそのペンネームで書かれたんですか。

竹内　雑文ですね。同人雑誌には小説も書いているかも知れない。

ところが、今日に至るまで処女作「世界黒色陰謀物語」の所在は全く分からず、また、「狐塚牛太郎」の筆名で書かれた作品はひとつもその存在が判明しなかった。

このたび、昭和八年に創刊された文学系の雑誌をいくつか閲していったところ、そのなかのひとつ「文化集團」（昭和八年六月創刊――昭和十年二月終刊、通刊二十一号）に、武田泰淳が「狐塚牛太郎」の筆名で執筆していることを確認した。それは次に記す計三号である。

中国現代文学に関する研究および評論的文章が以下の二点。

・「中國左翼文壇の現狀」（「文化集團」第二巻第七號、昭和九年七月一日発行）

・「中國文學情報」（「文化集團」第二巻第十號、昭和九年十月一日発行）

翻訳が次の一点である。

・「蜜蜂（張天翼）」（「文化集團」第二巻第八號、昭和九年八月一日発行）

これら三点は全集未収録であり、「武田泰淳年譜」にもその存在についての記載はない。

依然として処女作の存在は不明のままであるが、本稿では拙稿「武田泰淳と「文化集團」（その一）（その二）」[4]に引き続き、翻訳「蜜蜂（張天翼）」（「文化集團」第二巻第八號、昭和九年八月一日発行）の紹介をしたい。まずは、全文を掲げる。

なお、仮名遣い、旧漢字の表記等は原文のままとした。句読点の不備や誤植、散見する伏せ字についてもあくまで原文にしたがい、敢えてそのままとした。

蜜蜂

—中國農村少年の手紙—

張天翼

第一信

姉さん。今日あなたの手紙がつきました。ちやうど僕は王寅生と一緒にもどつてきたところでした。

王寅生つて虎公のことです。王寅生はもう十三歳ですから僕より二つ大きい。陳福泉も十三歳。陳福泉は小和尚です。

姉さん。あなたは毎日の事をみんな手紙にかいてよこせと云ひますから僕はみんな書きます。僕はそれからあなたにやる手紙を書きました。僕は家にかへつて來て、本包を置いて小便に行きました。小便がすんでから僕は手紙を書きました(ママ)

今ぢや、僕達はお金をためなくちやならないんだよ。方先生がお金をためさへすれば良い人間になれるつて云つたんだ。方先生は二つの字を書いたよ。『儉德』——此の二つの字はほんとに書きにくいな——。

方先生が云つた。

『人は儉德がなくてはならない。日本に一人の金持があつて、うんとうんとお金をもつてゐました。人が金持に「あなたはどうして金持になつたか?」ときくと金持は「わたしはためたんだ(ママ)」と云ひました。お金をむだづかひしてはいかん。お金はとつておく、これが儉德です。』

方先生がそういふから僕達は儉德會をこさへるんだよ。僕達みんな一週間に何錢かためて、幾十幾百年たてばとても金持になるんだ。方先生が云つた。

『お前達は賛成か不賛成か?』

『僕、賛成。』

『賛成。』

『方先生。僕は不賛成。』

『何故不賛成だ？』

『僕は銭がねえ。おつ母あは僕に銭をくんねえよ。』

『お前はお母さんに云ひなさい。貯金はたいへんいいことだ。人はみんな儉徳が必要だ。お前の家にはお金が少しなら少し貯金すればいい』

僕は王寅生と陳福泉と一緒に一週間に銅銭一つためる昨日は王寅生と陳福泉と一緒に銅銭一つ持つて行つて儉徳してきた。僕は儉徳すると愉快だな。姉さんは儉徳するかい。方先生が云つたよ。人は儉徳しなけりやいけない。儉徳すれば良い人になれるんだつて。岳飛もきつと儉徳したんだ。

馬俊が荘克襄と話してた。

『あいつ達、一週間にたつた銅銭一つためるんだつて、あいつらほんとに面よごしだ。己達は一週間に四毛銭だなあ――？。』

馬俊、あいつは雞のけつだよ。馬俊が一番いけない奴だ。虎公は馬俊は一日に一ぺん荘克襄のけつを舐めるんだつて云つた。荘克襄は頭でつかちだ。すると荘克襄は云つた。

『己達は一週間に四毛銭ためるんだ。あいつらは一週間にたつた銅銭一つ。己のお父さんはおれに三千塊銭ためてくれたよ。』

王寅生はどなり出した。

『たいしたことねえや、たいした事ねいや』

『お前達お金がないんだ。お前達……』

馬俊が頭でつかちの手をひつぱつた。

『己達には自動車があらあ――。なあ――。自動車は飛ぶやうに走らあ。』

僕はそこで云つてやつたよ。

『馬俊は頭でつかちのけつをなめるじやねいか。』

頭でつかちのお父つあんが一番悪いんだ。頭でつかちのお父つあんは大頭でつかちだ。頭でつかちのお父つあんは蜜蜂の番頭だ。頭でつかちのお父つあんの蜜蜂が僕達の稲の漿を吸つちまふんだ。

王寅生はポンと椅子の上に跳び上つた。

『頭でつかちの家の蜜蜂が己達の稲の漿を吸つちまふんだ。イタリー蜜蜂をやつつけろい！』

『へん。お前達にできるもんか。己達は一萬二千箱も

イタリー蜜蜂をもつてるんだ。己達は上海に三臺自動車があらあ。』

いつてゐると、陳福泉がパタ〳〵ととんできて云つた(ママ)『己達にだつてけつ車があらあ。己達は一百個も一千個も一萬個もけつ車があらあ。己達のけつ車にや頭でつかちや犬を積みこむんた(ママママ)』

『己達のけつ車に大頭でつかちも積み込め(ママ)』と虎公が云つた。

そこで皆はウアー〳〵とどなり出した。

『大頭でつかちも積み込め。鷄のけつのお父つあんも積み込め。』

『大頭でつかちをつみこめ(ママ ママ)。蜜蜂の番頭をつみこめ(ママ ママ)。』

どなつてゐると黒牛がかけて來た。黒牛は僕達よりでかい。黒牛は二年級上だ。黒牛は講壇にのぼつた(ママ)。

『頭でつかちのお父つあんが飼つてる蜜蜂が己達の稻の漿を吸つちまふ。己達は頭でつかちをやつつけるんだ。』

『頭でつかちをやつつけろ!』

頭でつかちは云つた。

『やる氣か!』

鷄のけつが頭でつかちと一緒になつて云つた。

『己達は鮮長〔譯者註〕(鮮長は縣長の事、鮮と縣は音が同じであるから少年が誤つたのである。)にたのんでお前達をとつつかまへてやるぞ。』

『己のお父つあんは鮮長と親友だぜ、己のお父つあんが鮮長に賴んでお前達のお父つあんをとつつかまへるぞ。己のお父つあんは一萬二千箱もイタリー蜜蜂をもつてるんだから。』

『お前達の蜜蜂が己達の稻の漿をすつちまうんだ。イタリー蜜蜂をやつつけろ!』

『頭でつかちをやつつけろ!』

『鷄のけつのお父つあんを打倒しろ! 鷄のけつのお父つあんは大鷄のけつだ。大鷄のけつは振華養蜂場の仕事をしてるんだ。あいつは大頭でつかちを助けてるんだ。』

王寅生がどなつた。

『大鷄のけつは大頭でつかちのけつをなめるんだらう(ママ)』

黒牛はそれから黒板の上にガリ〳〵と書いた。

一切の頭でつかちをやつつけろ！

黒牛敬書

それから僕達はどなり出した。

『一切の頭でつかちをやつつけろ！』

僕達はワアー〳〵唱歌を歌ひ出した。

『頭でつかち。水飲んで。かめをひつくらかへして。足折つた。』

歌つてゐるうちに僕は小便がしたくなつた。小便をすますと僕はもどつて來た。それから方先生が來た。

方先生が云つた。

『お前達は今後、莊克襄の父親をやつつけろなんて云つてはいけない。あの子のお父さんは非常に良い人だ。あの人のやつてる蜜蜂の事業は奬勵されなけりやならないし、あの人の飼つてる蜜蜂は非常に成績が良いんだ(ママ)』

『あれ達の蜜蜂は己達の稻の漿を吸つちまふんです。』

『振華養蜂場はもと九里松にあつたのが、九里松は田に近いから稻の漿を吸ふといけないといつて、今ではあの人は和尙橋へはこんでしまつてゐる。稻の漿が吸へる筈がないぢやないか。』

『己のあんちやんは今でも蜜蜂が己達の稻の漿を吸つちまふつて云つたよ。』

『わかつた。わかつた。餘計な事を云ふな。』

方先生はいけない先生だ。方先生は頭でつかちを助けてる。僕達は方先生は嫌ひだ。僕達はそれから、羅先生と徐先生が好きだ。羅先生は徐先生と結婚するつて。徐先生は今青倒に行つてゐます。(譯者註)(青倒は青島の書きちがへ)

徐先生は明日は學校へ歸つてくるよ。

方先生はイタリー蜜蜂は一番よい蜜蜂だと云つたけど僕達みんなはイタリー蜜蜂が一番惡いと云つた。惡いも惡いも一番不良の蜜蜂だ。方先生はイタリーがとてもでかい國だと云つたけど姉さん。(ママ)イタリーはそんなにでかいかい——五里ぐらいあるの？　イタリーは北京や江蘇や和尙橋のどれよりでかいかい？　方先生はイタリーには今、大英雄がゐるつて云つたよ。姉さん。大英雄つて梅爛方じやないのかい？

話してゐると體操になつた。課業が終つてから家にかへつた。僕は其の時、田の上にたくさんの蜜蜂を見た。頭でつかちの蜜蜂が又來て僕達の稻の漿をすつてるんだ(ママ)

むかし、振華養蜂場が九里松にあつて頭でつかちの蜜蜂は其の時、僕達の稻の漿を吸つてたんだ。むかし、其の時お父つあんとあんちやんと皆のお父つあんとあんちやんは羅先生と徐先生と師範生と多勢の人達、一千人一萬人もの人と一緒に鮮長の役所へ振華養蜂場を引つ越しさせてくれと請願に行つた。請願したんで振華養蜂場は九里松にはなくなつて、それから振華養蜂場は和尙橋へ引つ越した。今又頭でつかちの蜜蜂はとんで來て稻の漿を吸つてゐます。

お父つあんと兄ちやんは話してる。

『今年も又どうしやうもねえ有樣だあ。稻の漿をみんな吸つてしまへば、おらたち皆もおしめえだ。年貢をおさめなけりや四大爺は又きつと老磨をおらたちの所へさしむけるでなあ(ママ)』

兄ちやんは口を喰ひしばつた。

『なんとか方法考へなくちやならねい(ママ)』

『蜜蜂は和尙橋へ引つ越したが、やはりいかねい。蜜蜂はやつぱり稻の漿を吸つてるだ。』

話してると松伯伯が來た。松伯伯は虎公のお父つあんです。みんなはそれから相談したけど、蜜蜂の話になると二番目の兄ちやんが僕をねせた。

書けなくなりました。僕は小便に行かなくちや。小便がすんだらねなくちやなりません。姉さん。あなたももうねむいかい。

第二信

姉さん。今日、徐先生がかへつて來た。うれしいな(ママ)あ僕達みんなはどなつた。

『徐先生歡迎！　徐先生歡迎！』

徐先生は昔にくらべると又奇麗(ママ)になつた。徐先生はほんとに姉さんみたいだ、(ママ)だから徐先生は姉さんの親友だ(ママ)徐先生は僕を可愛がるよ。それから徐先生は僕に六對の品物をくれました。是は役に立つ品物で——此の字は僕は書けない。此の品物は長くて脚にはくもの

で黒くて短靴ぢやないもの。姉さん知つてる？　もう一遍云ふよ。長くて、黒くて、脚に穿くもので短靴ぢやないものです（ママ）

頭でつかちと鶏のけつはああいふもの持つてゐない。徐先生は頭でつかちと鶏のけつが嫌です。徐先生は頭でつかちと鶏のけつにはああいふ品物をやらないのです。

頭でつかちは云つた。

『こんなの珍しかないや。己の姉さんは百そくも持つてる。己の姉さんのは絲のだ（ママ）』

『お前の姉さんは死んでるのじやねいか。己の姉さんは生きてるのだぞ。』

陳福泉は其の時片手をふりあげた。

『頭でつかちの家の品物はみんな死んでるんだ。頭でつかちの家の蜜蜂だつて死んぢまふぞ。己達の粟のがいいや。』

『己達は頭でつかちの蜜蜂をやつつけやう。』

『やるか！』頭でつかちが云つた。『馬俊。あいつやれるもんか。なあそうだらう。』

鶏のけつは頭を頭でつかちの耳のそばへ近よせて、それから云つた。

『己達は鮮長にたのんでお前達をとつつかまへるぞ（ママ）』

王寅生はその時僕に告げた、（ママ）鮮長は王寅生の子供だ。（ママ）（譯者註）（惡口の一種である）

『大頭でつかちは己の子供の友達だい。頭でつかちは己の子供の友達の子供だい。やあーい。あいつら己の話がきけねえんだ。恥かしがつてやがらあ。恥かしがつてやがらあ――。』

『先生に云ひつけるぞ。』頭でつかちが云つた。

『プツ！』陳福泉はプツ〳〵〳〵と口中のつばを頭でつかちのからだに吐きかけた。

頭でつかちはその時云つた。

『なぐるぞ！』

頭でつかちは陳福泉にげん骨をくらわさうとしたか、（ママ）陳福泉は早くも逃げのいた。頭でつかちはそれで空をうつた。僕達みんなはワァー〳〵とどなりだした。

『なぐれないのか。腐れ足の犬ころめ。なぐれないの

か腐れ足の犬ころめ。』

頭でつかちは泣きそうになつた。鶏のけつは頭でつかちにむかつて言つた。

『あいつらを相手にするのはよそう。行つちまはうぜ。』

頭でつかちは鶏のけつの言ふ事をきかない。

鶏のけつはそれから又言つた。

『あいつら皆わる者だぜ。己達は鮮長に頼んであいつ達をとつつかまへてもらはう。己達の家には一萬二千箱のイタリー蜜蜂があるんだからなあ――』

頭でつかちが云つた。

『チエツだ。イタリー蜜蜂はお前の家のか？　イタリー蜜蜂は己の家のお父つあんのものだい。』

『お前、己と一緒にゐるのが好きでねいのか？』

『チエツだい』

黒牛がとんで來た。

『羞しいや。羞しいや。おべんちやらを云つてかへつてやりそこなやがつた。』

『羞しいや、羞しいや。』

『あーあー。羞しいや』

『はツはツ。羞しくて死んまぢふ。一二三、』

『一人が羞しい、二人が羞しい。中の骨は一本。』〔著者註〕（同じだといふ意味）

僕達みんなはうたひ出した。

唱つてると『ワアー』と其の時、鶏のけつが泣き出した。鶏のけつは前から泣き虫なんだ、

僕達みんなはそれからワァー〳〵唱ひ出した。

『泣き虫野郎め。

稻草賣つてる。

賣り賣り和尚橋にやつてきた、……』

黒牛が歌ふ。

『賣り賣り和尚橋にやつてきた……

ほらおめえ達の先生がきたぞ。

みんな逃げろや。

一二三

逃げろや逃げろ！』

皆はバタ〳〵と馳けだした。

方先生はきいた。

『何だ、何だ』(ママ)

それから方先生は僕達にむかつて言つた。

『お前達みんなは莊克襄と馬俊を馬鹿にした。是は非常に良くない。同級生は仲良くするんだ。お前達は全校の生徒と仲良くならなくちやいかん(ママ)將來お前達は全國の同胞を愛するやうになるんだ。だから同級生はみんな仲良くしなくちやいかん(ママ)』

『方先生、あいつ達が己達を馬鹿にしたんです。あいつたちが僕達にはお金がないつて……(ママ)』

『方先生。あいつ達の蜜蜂は己達の稻の漿を吸つちまうんだよ。』

『方先生。あいつ達は己達をとつつかまへるつて言つたよ。』

『わかつた。わかつた。』方先生は言つた。

『お前達子供は餘計な事いつちやいかん。これからあれ達を馬鹿にしちやいかんぞ。』

方先生は頭でつかちに加勢してるんだ。

僕達はそれから徐先生に話した。

『方先生は惡いんだよ。徐先生は方先生と仲良くしちやいけないよ。』

徐先生は笑ひ出した。徐先生の手は僕の頭の上につかつた。徐先生は言——、徐先生は何にも言はなかつた(ママ)

『ねえ——。わかつた？　これから、先生は方先生と仲良くしちやいけないよ。』

『ええ。私はきつとあんた達の云ふとほりにします。』

それから國語になつた。國語が終つてから陳福泉はすぐに僕に言つた。

『己は徐先生が方先生と話してるのを見たぞ』(ママ)

『ほんとか。徐先生は方先生と仲良くしないつていつたのになあ—。』

僕はそれから徐先生の部屋へかけて行つた。

『徐先生。楊先生が云つたよ。人はすべて約束は破つちやいけないつて。あんたは約束を破つた。』

徐先生は笑ひながらいつた。

『私がどうして約束を破つたの？』

徐先生はまだ笑つてる。

僕は云つた。

『あんたは方先生と仲良くしないつていつたぢやないかそれから又方先生と話してらあ』

『私は仲良くならないといつたんです。話はしなくちやなりません。私は彼と仲良くならないだけですよ。早くおかへり。お父つあんが家でまつてるよ。』

僕は僕達なら仲良くない人とは話もしないといつた。僕はそれからかけ出して來て、虎公と一緒にかへつた。僕達は澤山の蜜蜂を見た。田の中には澤山の蜜蜂がゐた幾千幾萬も！

僕達はどなつた。

『一切の頭でつかちをやつつけろ……』

第三信

姉さん。徐先生はあなたの手紙を僕にわたして呉れました。

『襪』（たび）といふ字はほんとに難しいなあ。

『それから』と云ふ字は使ひ方がまちがつてゐるのかい？　黒牛の作文には澤山『それから』があつたけど甲上を一つもらつたよ。おかしいな。黒牛は何故甲上をもらつたの？

『むかし』といふ字は使ひ方が違ふの？

羅先生がいつたよ。『むかし』は『以前』だつて。『むかし一人の國王がゐました』は『以前に一人の國王がゐました』だらう。

姉さん。僕は姉さんの手紙を見てうれしかつたよ。僕はだけど少し不愉快です、田ん中に幾千幾萬の蜜蜂が——ウンウンウンウンウンウンウンといつてるんだ！お父つあんも兄ちやんも不愉快なんだ。お父つあんも兄ちやんも今年は粟がとれなくなるんぢやないかと心配してる。牢屋へ入らなくちやならない。

今日は晴れた。頭でつかちのイタリー蜜蜂は飛びまはつては稻の漿を吸つてゐる。蜜蜂はほんとに多いんだ。路を歩いてると蜜蜂が顔にぶつかる。ウンウンウンウン天にも蜜蜂。地にも蜜蜂。蜜蜂は田の上にかさなりあつてる。蜜蜂は僕の鼻の孔をつめちまつた。僕は鼻がなくなつてしまつた。何千何萬。何十萬の蜜蜂が天を眞暗くしてしまつた。まるで晩飯をたべてしまつてからみたいに。何千何萬何十萬の蜜蜂がウンウン

ウンウンと雷みたいだ、蜜蜂つて全く悪い野郎だ。頭でつかちも悪いんだ頭でつかちは何故蜜蜂なんか飼つたんだらう、頭でつかちは何故蝶々を飼はないんだ。蝶々はきれいだがなあ。今日僕は黒牛と陳福泉と王寅生とで大きな蝶々を一匹つかまへた。とび切り大きい奴。面白かつたよ。蜜蜂なんか一寸もきれいぢやない。羅先生は頭でつかちの家ぢや蜜蜂を飼つて錢をもうけるんだつていつた。大頭でつかちは蜜蜂の番頭で。大頭でつかちはうんとうんとお金をためたんだ。

黒牛がいつた。

『大頭でつかちが金をためるつたつて己達のしつたこつちやねい。大頭でつかちの蜜蜂が己達の稲の漿を吸ふから大頭でつかちを己達がやつつけるんだ。』

『大頭でつかちをやつつけろ！』僕達はそこでどなりだした。

僕はそれからすぐ家へかへつた。姉さん。『それから』を使はないとうまくつづかないんだよ。此の『それから』も使ひ方がちがふかい。

田の上は蜜蜂で一杯だ。ウンウンウン。

お父つあんと兄ちやんと二番目の兄ちやんと長伯伯と多勢の人が蜜蜂をやつつけに行つた。

兄ちやんがいつた。

『黄虫（いなご）よりひでえや』

ウンウンウンウン。何萬匹の蜜蜂を追つ拂ふと又何萬匹もやつてくる。ウンウンウンウン。一千匹殺すと一千匹やつて來る。お父つあんも兄ちやんも泣きそうになつてゐる。

お父つあんが云つた。

『黄虫は天命だあ。仕方ねえ。ところが蜜蜂の番頭のやつ蜜蜂を養つて己達の稲の漿を吸はせちまやがる。このろくで無し野郎め！』

いひながらワァーくと悪口をいひ出した。みんなとても蜜蜂の番頭を恨んでゐた。みんなはイタリー蜜蜂がきらひだつたんだ。

後で僕は晩飯をたべた。晩飯がすんでから松おぢさんと長おぢさんと良さんとまだ幾人かの人が來た。その人達が來たら、お父つあんは僕に勉強をさせた。松おぢさんと長おぢさんと良さんのお父つあんと兄ちや

んはそこで大聲で話し出した。

松おぢさんはためいきをついた。松おぢさんの顔は泣き出しそうだ。松おぢさんは云つた。

『おらあもう年をとつたあ。己あよつく此の世の中を見て來ただあ。おら達あ運がわりいだよ。よくねえ事だらけだ。去年は黄虫がいたにやいたが、今度ときたら蜜蜂なんか養ふ奴がゐて稻の漿は吸はれちまふ。ふんとにおら達の血や肉をすする様なもんだ』

話ししながら松おぢさんは又ため息をした。ためいきをついてゐて、皆は何もいはなかつた。お父つあんも何もいはなかつた。お父つあんは煙草をふかして煙管をパタ〳〵とたたいた。

長おぢさんはいつた。

『おら達は何とか方法を考へなくちやならねい』

『いま一度鮮長の役所へ請願に行くかあ』と良さんがいつた。

兄ちゃんが口をくひしばつた、

口をくひしばつて兄ちゃんが云つた。

『鮮長が承知するかなあ?』

『おらあ承知しめいと思ふだ』お父つあんは又煙草をすうすうと音をたててふかした。『蜜蜂がでえじか粟がでえじか?。』

松おぢさんがいつた。

『こらあ天命だあ』

少したつて松おぢさんが又言つた。

『人間の力じやどうしやうもねい。なんでもかんでも天命があらあ。去年は黄虫。今年は蜜蜂、請願請願つて。おらあやつぱりどうしやうもねいと思ふだ。鮮長だつてどうしる事もできねえ。こらあ皆天命だあ。』

話をしながらためいきをついた。

あとで僕は算術をやつた。僕は算術が終つてから又松おぢさんと長おぢさんとお父つあんが話をしてるのをきいた。

お父つあんは松おぢさんにいつた。

『蜜蜂におら達の稻の漿を吸はしとくのかあ?』

松おぢさんは何も言はなかつた。松おぢさんはためいきをついた。泣きそうだつた。

良さんと兄ちやんはおこり出した。兄ちやんがいつ

た（ママ）

『どうしても何とか考へなくちやならねい（ママ）』

お父つあんが言つた。

『も一度皆で談合してから、役所へ行つて請願すべい（ママ）』

良さんは卓をたたいて、どなつた。

『ろくでなし野郎め！』

サツサと皆はかへつた。

サツサと僕もねなくちあ。

さよなら。さよなら。また明日。また明日。

今日はお父つあん兄ちやんと松おぢさんと羅先生と長おぢさんと黒牛のお父つあんと多勢のお父つあんと多勢の人がワアー〳〵と話してた。多勢の人は皆で明日、鮮長の役所に請願に行くんだ。

黒牛が言つた。

『明日みんなは請願にいかなくちやいけねい。』

三公がきいた。

『何故請願しなきやいけないんだい？』

『頭（ママ）でつかちの蜜蜂が己達の稲の漿をすつちまふから己達は鮮長にたのんで振華養蜂場を引つ越しさせてもらうんだ。』

『蜜蜂を打倒しろい（ママ）』と三公がどなつた。

どなると黒牛が又いつた。

『明日は騒動になるかもしれねいぞ（ママ）』

陳福泉はそこで黒牛に何故騒動になるのかきいた。

『おらあ知らねい。』黒牛が言つた。『何時だつて騒動になるんだが、明日はきつと騒動になるんだあ。己達は己達のお父つあんにしたがはなきやならねい。』

僕が言つた。

『己達は黒牛を己達の體操の先生にしやうや。』

王寅生はそこでどなり出した。

『黒牛を擁護しろい！』

みんなはそこで黒牛を擁護した。

『黒牛を擁護しろい！』

擁護し終ると拍手した。拍手し終ると黒牛は僕達が何人ゐるか勘定した。一、二、三、四、五、六、……全部で二十七人だ。

黒牛が言つた。

『晩飯をくつたら栗山へみんな來い。』
『おつ母さんに云はなくていいか』
『いいよ』黒牛が云つた。『お父つあんとおつ母さんには云ふぢやねい。お父つあんとおつ母さんに云へば來させやしねいよ』
それから黒牛が又云つた。
『己達にはまだ軍師が一人いるぜ』
僕は王寅生を軍師にしろとどなつた。
『賛成か不賛成か?』
『賛成賛成!』
『王寅生が軍師だぞ』
『王寅生を擁護しろ、萬歳!』
王寅生が軍師となつた。
話してると頭でつかちと鶏のけつがかけて來た。黒牛が歌つた。
『鋏でちよん切れ、鶏のけつを。
泣き虫野郎め、ほえづらかくな。』
鶏のけつが云つた。
『もう一度歌つて見ろ。』
『わしらは歌ふぞ』
『鋏でちよん切れ、鶏のけつを。
泣き虫野郎め、ほえづらかくな。』
『先生に云ひつけてやるぞ』
黒牛が鶏のけつの眞似をして云つた。
『先生に云ひつけてやるぞ』
『ほんとに云ひつけてやるぞ』
鶏のけつはそこで走つて行つた。頭でつかちも走つて行つた。鶏のけつと頭でつかちは先生に云ひつけに行つたんだ。
『さよなら』黒牛も行つてしまつた。
それから算術になつた。算術が終ると家へ歸つた。
今日は蜜蜂は昨日より又多い。ウンウンウンウンウンウン蜜蜂はいやな奴だなあ!
明日は請願に行くんだ。僕はそこで小便に行つて御飯をたべた。御飯がすむと栗山へかけて行つた。お父つあんと兄ちやんと松おぢさんと良さんと羅先生は皆ワアー〳〵と話をしてゐた。お父つあんと兄ちやんは僕が外へ出かけるのを知らなかつた。僕はそれから栗

山へかけて行つた。

三公は栗山にゐた。黒牛と陳福泉も栗山にゐた。王寅生とまだ澤山の人が栗山にゐた。

『萬歳！　萬歳！』

どなつてゐると三公が僕に粽子糖をくれた。

僕はそれをたべた。三公の粽子糖はからくて、たべてるうちに甘くなつた。姉さん、三公の粽子糖は何故、からいんだい？　粽子糖に鹽をかけてあるのかい？。(ママ)僕は三公にきいたが、三公は知らなかつた。

黒牛が云つた。

『開會します。』

『ヒヤヒヤ(ママ)』

『黒牛を擁護しろ！　王寅生を擁護しろ！』

黒牛が言つた。

『騒いぢやいかん。騒いぢやいかん。』

みんなは何も言はなくなつた。あとでみんなは相談した。明日はみんは大人についてゐき、僕達のお父つあんにしたがふんだ。

陳福泉が言つた。

『己達は一本づつ棒を持つて行かなくちやいけねい(ママ)』

それから僕達は木の枝を折つた。皆、棒ができた。

王寅生が言つた。

『小石もいるだらう。小石は己達のたまだあ。たまはみんなポケットの中へ入れとけ(ママ)』

僕達みんはな(ママママ)愉快なあ(ママ)。僕達はお父つあんにしたがふ事が出來るんだ。僕達には體操の先生がある。軍師がある、(ママ)愉快だなあ。蜜蜂が僕達の稻の漿を吸ふから僕達はたまであいつをやつつけるんだ。誰も僕達を馬鹿になんかできないぞ。』

僕は黒牛に云つた。

『お父つあんが僕をよんでるからかへらなくちやあ(ママ)』

『よし。皆かへつていいぞ(ママ)』

『黒牛萬歳！』

『みんな萬歳！』

『氣をつけ！　開散！』

僕はそこでかけて歸つて來た。

明日。又明日。姉さん又あした。

さよなら。氣をつけ！　姉さんに敬禮い！

第四信

今日は徐先生の部屋にとまつてゐました。

今日はいろんな事があつたよ。

徐先生は明日僕を送りかへしてやる、お父つあんと兄ちやんは明日家へ歸つて來ると說明したよ。今日はいろんな事があつた。今日は請願したんです。

今日は早くに算術があつて、あとで手工、それから理科、それから國語があつた。それからパタ〳〵と御飯をたべてしまつた。御飯がおはるとみんはそれから城（まち）へ行つた。多勢の人だよ。お父つあんと兄ちやんと二番目の兄ちやんと長おぢさんと松おぢさんと良さんと徐先生羅先生とみんなのお父つあん兄ちやんと澤山の師範生と城へ行つた。

黑牛が言つた。

『己達は隊を組んで行かなくてもいいぞ。己達が一緒になつて行くとお父つあん達は己達がかけて行くのをとめるからなあ』

陳福泉がどなつた。

『石つころを拾へ』

みんなは地面の石つころを拾つた。石つころはポケツトへ入れた。僕達は竹切と木の枝とさほと棒きれと木の枝を持つた。

『どなつちやいけねい』

王寅生が僕の耳たぶに口をあてて云つた。

『今日はきつと騷動が起るぜ』

僕達はたくさんゐるからこわくないと思つた。

黑牛がパタ〳〵とかけて來た。

『城門のところに兵隊がゐるぞ。己達の棍棒を兵隊に見せちやいけねい。兵隊が己達をとがめるからなあ』

松おぢさんがためいきをついた。

『不成功づらあ』

城門の兵隊は鐵砲をもつてゐる。兵隊の鐵砲の頭には刀がついてゐる。兵隊はとても多いよ。兵隊はとてもおつかないや。あれ達にも一人體操の先生がゐて、兵隊の前をパタ〳〵と行つたり來たりしてゐる。兵隊の體操の先生は腹の中途にとても長い長い紙切り包丁をぶらさげてゐる。

『いけないぞ！』
『なんでもねいよ。おら達は法を犯すんでねい。』
『おら達は請願するだあ。何も心配することはいらねい。』
『城へ入る時には騒いぢやいかん』(ママ)
僕達はそこで城へ入つてしまつた。僕の木の枝は兵隊に見つからなかつた。僕等は兵隊にとがめられなかつたみんなはそこで城へ入つた。城の中には通りがあつた。通りには兵隊がゐた。通りにはとてもうんと人がゐたよ(ママ)
みんなはどなつた。
『鮮長に頼んで振華養蜂場を引つ越さしてもらふだ』(ママ)
『振華養蜂場をどかせろ！』
『みんな公平にやつて下さい』(ママ)
どなりながら鮮長の役所に來た。皆は操練所におちついた。役所の門の兵隊はもつと多かつた。兵隊はずいぶん居るなあ。二人の體操の先生の腹には長い紙切り包丁がぶらさげてある。
『おら達は鮮長にお目にかかりてい。』
羅先生もパタ〳〵と兵隊の體操の先生のところへ走つて行つた。羅先生は兵隊の體操の先生と話をしだした。僕もかけて行つた。
一人の兵隊が言つた。
『人をやつてたのんでやらう』(ママ)
そう言つて兵隊の體操の先生は一人を中へやらせた。羅先生が皆に言つた。
『あれたちは鮮長をよびに行つた。みなさん一寸待つて下さい。』
皆はそこで待つてゐた。いくら侍つてゐても(ママ)鮮長はでて來なかつた。みんなはわー〳〵騒ぎ出した。
『なんで出て來ねえだ？』
『まだでて來ねえなら己達が入つてくぞ。』
話してゐるけど鮮長はでて來ない。
『もう一時間も待つたぞう。』
『おら達は自分で入つて行くべえ』(ママ)
『……』(ママ)
『鮮長を早く出してもれえてえ』(ママ)
『まだ出てこねえか！』

一人が小聲で話した。

『頭がまだでてこないかな』(ママ)

何時間も何年(ママ)も待つてゐた。鮮長はまだ出て來ない。

『まだ出て來ねえなら、おら達は遠慮しねいぞ』(ママ)

侍(ママ)つているけど鮮長は出て來ない。又何年(ママ)も何年(ママ)も待つてゐた。待つてゐた皆がどなつた。

『うまいぞう。出て來たあ。』

鮮長が出て來た。鮮長は役所の門へやつて來た。鮮長が言つた。

『お前達何か願ひ事があるならわしに言ひなさい。わしがきつと鮮長に說明してあげる』(ママ)

『あーんだ。鮮長でねいのか』(ママ)

『己達は鮮長に自分で出て來てもれえてえ。』

その人が言つた。

『鮮長は今、公用がある。お前達はわしに云ひなさい。それで同じだ私(ママ)がすぐに鮮長に說明してあげる』(ママ)

『いかねい。いかねい。己達はどうしても鮮長にあいてい。』

『己達は入つて行くべえ』(ママ)

『己達は自分で行つて鮮長にあふべえ』(ママ)

『お前達が鮮長にあつても同じ事を云ふだけじやないか。鮮長は公平無私の人だ。わしに云へば鮮長に話してやるから同じでないか。』

『おら達は鮮長にあはねばけえらねい。』

『おら達は自分で行つて鮮長にあふべえ』(ママ)

『鮮長は公用があるんた(ママ)。お前達は明日まで待つても駄目だぞ』(ママ)

『チエツ』(ママ)

『行つちまへ』(ママ)

『誰がおめえなんかと話しするか』(ママ)

羅先生と良さんがそれからその人に言つた。

『どうしても我々は鮮長にあひたいのです。』

羅先生が又言つた。

『あなたは我我(ママ)が、あなたに言へば鮮長に說明してあげると言ふくらひなら、我我(ママ)が彼にあひたいのだとつたへて下さい。』

その人は暫く立つてゐたが中へかけ込んで行つた。

みんなは待つてゐた。待つてゐても鮮長は出てこなかつた。皆はそれからがなり出した。

『何故、又出てこねいだ?』

『ふんとに死にそうだ!』

『あいつと一緒にすぐ出て來い。』

何年(ママ)も何年(ママ)も待つてると鮮長(ママママ)が出て來た。鮮長(ママママ)は門のところへかけて來た。鮮長(ママママ)が云つた。

『鮮長はお前達に代表を數人出して面會に來るやうにと言つてる。』

皆は言つた。

『ふんとに面倒くせいな(ママ)』

黑牛がかけて來て僕の耳に口をつけて言つた。

『用心しろ!』

僕も三公に言つて用心させた。陵(ママ)福泉が……になりそうだと言つた。

みんなはそこで羅先生と良さんと兄ちやんを代表にした。羅先生と良さんと兄ちやんは、役所の門の中へ入つて行つた。鮮長とあひに行つたんだ。

『羅三。(譯註、羅先生の呼び名)おめいきつと鮮長に返答させにやならねいよ。』

『お前達のいふとほりにやるとも。』

羅先生のお父つあんがやつて來た。羅先生のお父つあんが言つた。

『おめえ達旦那に面會したら丁寧にやんなよ。おらたちに返答してくれるように言ひなよ、おめえ達少しあはれつぽくもちかけねいよ。』

羅先生のお父つあんが話してると草鞋のひもがほどけた。羅先生のお父つあんは草鞋のひもを結んでゐた。結んでゐるうちに羅先生と良さんと兄ちやんは役所の門の中へ入つて行つた。

皆は又待つた。

羅先生と良さんと兄ちやんはでて來ない。

皆はまだ待つた。

羅先生と良さんと兄ちやんはでて來ない。

僕と黑牛と王寅生は役所の門の所へかけて行つた。見えない。

『向ふへ行け!』と一人の兵隊が言つた。

『チエツ(ママ)』

僕達は又かけてきた。

王寅生が云つた。

『僕達はみんな一、二、三、四、五と數へよう。百まで數へて出て來なければ……なるぜ』(ママ)

一二三四五六七八九十十一、十二、……八十七、九十九、百。

でてこない。……陳福泉が言つた。

『俺達は少し早く數へすぎたんだ。もう一度百まで數へろ。』

一二三……九十九、百。

もう一度。一二三。……

それから又數へた。

ほんとに變だなあ。羅先生と良さんと兄ちやんはまだ出て來ない。

僕はそれから又數へた。百。百。百。百。百。

『あー。來た。』

……無いのかなあ。羅先生と良さんと兄ちやんが出て來た。

『鮮長は明日己達に回答すると云つてゐる。鮮長はそれから又、……』(ママ)

『いけねい！』

『鮮長に今日返事をしてもれえ。』

『おら達はみんなで行くべえ』(ママ)

『行くべえ。行くべえ。』

『皆で行つてあふべえ。』

皆はそこで、役所の門のところへ押しかけて行つた。

兄ちやんが言つた。

『鮮長はたいして話しやしねいんだ。たつた一言明日おら達に回答するといつたぎりだ。許すか許さねいかは言やしねいんだ。』

『……！』

兵隊は門のところに居て、皆を中へ入れない。兄ちゃんがどなつた。

『おれ達はどうしても鮮長に返事をしてもれえてえんだ蜜蜂(ママ)がおら達の稻の漿を吸つちまつたら己達はどうにも生きちやゆかれねい。』

『そうだ。粟がとれなけりやどうにも死ぬばかりだ。』

みんなは役所の門の中へ……役所の門の中はとても大きい操練場で、みんなは操練場におちついた。

『鮮長にあいたい。』

『鮮長をよんで來ておら達にあわしてくれ。』

兵隊は操練場の中へ入つて來た。兵隊は鐵砲を持つて操練場の中にゐた。

羅先生が兵隊の體操の先生に言つた。

『もう一度、行つて來て下さい。今、皆は鮮長にあいたがつてゐるんだから。』

兵隊の體操の先生はそこで一人によびにやつた。僕と三公が八十七まで數へると鮮長(ママママ)がでて來た。鮮長が云つた。

『鮮長は今急(ママ)がしい。お前達はすでに、代表を出して鮮長にあつて、鮮長は明日、回答すると言つたんだから、又やつてくるなんて一體、何の用があるんだ！』

『おら達はおめえにあひたいんぢやねい。鮮長にあひてい。』

『鮮長をよんで來てもれえてえ。』

その人が言つた。

『鮮長が自分で出て來ても同じだ。鮮長は明日お前達に回答すると言つたんだから。』

『おら達はどうしても鮮長にあひてい。』

それからその人が言つた。

『よし。わしが鮮長をよんで來てやらう。』

みんなはそこで又待つてゐる。今日は皆はずいぶん待つなあ。待つてると鮮長が出て來た。鮮長にはへげ(ママ)がある。鮮長の後には四五人兵隊がゐる。鮮長はおこつてゐる。鮮長が云つた。

『本官はすでにお前達の代表に言つた筈だ。本官は明日お前達に返答する。……』(ママ)

『鮮長さん。今日返事してもれえてえ。』

『一日のばせば、蜜蜂がそれだけうんと稻の漿を吸ふからな。』

『餘計な事を云つちやいかん。』鮮長が云つた。『本官は何事も公平無私である。お前方の苦しい事は本官も知つておる。ただし振華養蜂場にも苦しい事がある。此の前、お前達が振華を九里松から引つ越させてくれといふので九里松から和尙橋へ引つ越してゐる。これ

は皆お前達の請願によつてだ。それを又何故請願するのか。お前方も承知だらうが、大きな養蜂場が一度引つ越しするのは容易な事では無い。今又どこへ引つ越しさせようといふのか。それに又……』

『振華養蜂場がうごかなけりやあ今年の粟は一粒もとれねいや』

『餘計な事を言つちやいかん。』鮮長は少したつてそれから又言つた。『それに又、蜜蜂も養ふのも農業だ。陽督辨は非常に農業と實業を重んぜられる。本官は振華養蜂場を保護しろと言ふ陽督辨の命令をうけてゐる。だからお前達がやたらに騒ぐ事は許さん。陽督辨からは電報が來てゐてもし騒ぐものがあつた場合には……として捕縛するやうに云はれてゐる』

姉さん、陽督辨は鮮長よりでかいのかい？　姉さん砂糖をたべると罪になるのかい。〔譯者註〕（赤黨と吃糖は支那音が同一であるので子供はまちがつたのである）

良さんが言つた。

『己達は……ぢやあねいよ。己達は鮮長殿のとこへ來て請願してるんだ』

『くちばしを入れるな！　本官が話しおはつてから言ひなさい。行儀がわからんのか』

みんなはだまつてしまつた。

鮮長が言つた。

『お前達のだした代表に本官は云つた筈だ。本官は明日解答する。何故お前達はまたやつてきて騒ぐのか？

本官は民を害すること、〔譯者註〕（愛することと言つたのを書きまちがへたのである）子の如くしてゐる。だがお前達が騒ぎをやるやうなら本官もかまつてやるわけにはいかん。』

『騒ぐわけぢやねい。おら達は鮮長に方法を考えて頂きてえだ。己達の粟は一粒もとれそうもねいんだ！』

『そうか。本官も一言、いふことがある。本官も非常によく蜜蜂の事は知つてゐる。蜜蜂といふものは稻の漿は吸はんものだ。』

『なんで稻の漿を吸はねえことがあるもんか。鮮長の旦那、田ん中へ行つて見てもれえてえ』

『まだ餘計な事云ふか！』鮮長の眼玉はうんと大きくなつた。鮮長は言つた。『もう一度ぬかしたらすぐつ

まみ出すぞ』(ママ)

黒牛が小聲で言つた。

『ろくで無しめ！　自分ばかりしやべつて人にしやべらせねいなんて。ろくで無し。』

ろくで無しの鮮長が又言つた。

『蜜蜂は稻の漿は吸はない。本官は知識があるからお前達よりは良くわかつてゐる。蜜蜂は稻の漿は吸はない。蜜蜂はただ露水をのむだけだ。だから、お前たちは驚いたりあわてたりすることは無い。蜜蜂は田ん中で只遊んでゐるのだ。あれは露水をすふだけだ』(ママ)

兄ちゃんがおこつた。兄ちやんがそれから言つた。

『蜜蜜(ママ)が露水だけ吸ふんなら、蜜蜂をこの役所の庭の中へもつてくりやいいだ。この庭はとても大きくて露水が多いからよ！』(ママ)

鮮長の顔が赤くなつた。鮮長の眼玉もうんとでかくなつた。鮮長が大きな聲でどなつた。

『そいつは役人を馬鹿にしとる。……！　つかまへろ。』

兵隊が兄ちやんをつかまへてしまつた。

鮮長が又言つた。

『……つかまへろ。』

言ひながら鮮長は中へかけこんでしまつた。

鮮長は見えなくなつた。(ママ)(ママ)(ママ)

兵隊は……つかまへようとしたが、皆はおこり出した(ママ)

『つかまへるのか！』

みんなは兄ちやんを保護した。

一人の兵隊が……皆に向けた。

『手を放せ。放さない……！』

（八百字削除）

皆は城を走り出た。

『和尚橋へ行くべい。』

『あいつらの蜜蜂をやつつけろう』(ママ)

僕達も叫んだ。

『頭でつかちをやつつけろ』(ママ)

『蜜蜂をやつつけろ』(ママ)

『一切の頭でつかちをやつつけろ』(ママ)

『雞(ママ)のけつもだ！』

『軍師はどこへ行つたんだ?』

軍師は居なかつた。

三公が言つた。

『軍師は……つれて行かれたんだよ。』

皆はびつくりしてしまつた。

『どうしてだい。軍師が……』(ママ)

『頭でつかちの家へ行かう』(ママ)

僕達みんなはそこで棍棒と樹の枝と竹の棒をふりあげた。僕達は幾十幾百の小石を拾つた(ママ)僕達は小石をポケツトに入れたのでポケツトはふくらんだ。僕の心臓はドキ〳〵した。大人達は怒つてゐる。大人達は顔を眞赤にしてしまつた。世界中の人が皆蜜蜂を恨んでるんだ。皆はワアー〳〵云ひ出してパタ〳〵とかけて行つた。皆はあたまでつかちの祖先をのろつた。和尚橋についた。

『來たぞ』(ママ)

『蜜蜂を追ひ出せ』(ママ)

振華養蜂場では鐵の門をとぢてしまつた。

『畜生め。門をしめやがつた。』

振華養蜂場の鐵門の中には澤山の……ゐた……もつてゐる。

皆は叫んだ。

『おし込め』(ママ)

『門をあけろう』(ママ)

『門をあけなきや……ぞう』(ママ)

皆は鐵門に向つて押して行つた。

『押しちやいかん。』……云つた。『押すとつまみ出すぞ!』

黒牛が云つた。

『一、二、三、石を投げろ!』

僕達皆は石をとりだして、僕達の石は飛んでいつた。……はこわがらない。一人の……は笑ひながら云つた。

『小鬼め!』

『大鬼い!』と黒牛が云つた。

『大鬼でかいぞ

目玉パチクリ。

畜生野郎め』(ママ)

歌を歌つてやつた。——石が一つ飛んでいつた。
『頭でつかちと鶏のけつは何處へ行つたんだらう?』
『見えねえよ。』
大人達は鐵の門にぶつかかつた。ぶつかつたので鐵の門は動き出した。鐵の門は倒れそうになつた。……叫んだ(ママ)
『今度ぶつかつたら……するぞ』(ママ)
『ぶつつかれ!』
鐵の門はもう倒れそうだ。……しない。
『ハツハア。あいつ等には……がねいだよ。』
ぶつかるので鐵の門は破れそうだ。
『かけ出せ!』
『後の方から……やつて來たぞ』(ママ)
後の方から何十何百といふ……かけてきた。(百字削除)曹操と趙雲(二人とも支那の中世の有名な武將)が喧嘩をしたよりもつとひどい……。姉さん、王寅生は趙雲が一番強いんだと言つたよ。趙雲は黒牛より曹操より孔子より劉先生より兵飛よりかもつと強いんだつて、(ママ)趙雲が僕等に加勢してくれりやいいがなあ。趙雲は上海にゐないのかい? 僕等は趙雲を軍師に出來ればほんとにいいんだがなあ。
……なぐり廻つてみんなをなぐり散した。みんなはかけ出したけれど逃げられなかつた。右へ行つても……。左へ行つても……。……大勢の人をつかまへた。
羅先生は僕と陳福泉と黒牛と三公をつれて竹藪の中へ入つた。
お父つあんも兄ちやんも見つからなかつた。困つたなあ。僕は我慢が出來なくなつて泣き出した。三公も泣き出した。羅先生が云つた。
『泣くんぢやない。泣くんぢやない。お父つあんも兄ちやんも明日は家に歸つてくるぞ』(ママ)それからは僕は泣かなくなつた。
それから僕等は永い間、竹藪の中に待つてゐたので暗くなつてしまつた。振華養蜂場の門の前には人が一人もゐなくなつた。つかまへられたり逃げたりしてしまつたんだ。
羅先生が云つた。

『俺達は此の小道から行かう。』

黒牛は振華養蜂場の門のところへ行つて見てこやうと云つた。羅先生は黒牛に行かせなかつた。

『行つちやいけない。俺達と一緒に來い』(ママ)

黒牛は羅先生のいふ事をきかないでかけ出して行つた僕(ママ)と陳福泉はパタ〳〵かけて行つて、竹の後にかくれて黒牛を見てゐた。

僕は黒牛がかけ出して行くのを見た。僕は頭でつかちと一人の大人が出て來るのを見た。僕は一人……がそこに立つてゐるのを見た。頭でつかちは其の大人の人に云つた。

『こいつが黒牛だよ』(ママ)

大人はどなり出した。

『そいつをつかまへろ、小惡漢だぞう』(ママ)

黒牛は逃げ出した。

『あいつは放火しやうとするんだ。つかまへろう』(ママ)

……そこで黒牛を追ひかけた。駄目だ。追ひつかれそうだ。黒牛はやくかけろ。はやくかけろ！　ああ追ひかける方が早いぞ。追ひつかれそうだ。僕は熱くなつてきた。汗が流れた。黒牛も追ひかける人も見えなくなつた。

しばらくたつと、嗚呼。駄目だ。追ひかけた人と黒牛は一緒にやつて來た。その人は黒牛をつかまへてゐた。一人……が黒牛をつれて行つてしまつた。

どうしたらいいだらう。黒牛は見えなくなつてしまつた。

暗くなつてしまつた。羅先生は僕と陳福泉と二公をつれて學校へ行つた。

どうしたらいいだらう。お父つあんも兄ちやんも見えなかつた。僕はあわててしまつて、それからワァーツと泣きだした。

徐先生が言つた。

『お父つあんと兄ちやんは明日は歸つて來るよ。羅先生が城にお父つあんと兄ちやんを見つけに行くからね。泣くんぢやないの。あんまり泣くと可愛がつてあげないよ。』

陳福泉が云つた。

『泣くなよ。何とかしなくちやならねい。』

三公が云つた。

『おら達は大英雄にたすけてもらふべえよ。梅蘭方や關公やワシントンや皆に助けてもらふべえ。おらのお父つあんも見つからねえ。泣かねいでいられるかい。おら達は趙雲にだつて助けてもらふんだ。趙雲は一番強いんだ(ママ)ワアー。』

三公は話しながら自分も泣きだした。

もう僕は泣かなかつた。それから徐先生は李ぢいさんに三公と陳福泉を三公の家と陳福泉の家に送らせた。

それから羅先生がかへつて來た。羅先生はお父つあんと兄ちやんは明日歸ると言つた。

今晩は僕は徐先生の部屋でねむるんだ。

お父つあんと兄ちやんが明日になつたら歸りますやうに。

第五信

姉さん。お父つあんと兄ちやんは何故歸つて來ないの(ママ)

姉さん。羅先生は僕に徐先生を姉さんと呼べと言つたよ。羅先生は僕はこれから毎日徐先生の部屋に住むんだつて言つたよ。羅先生は徐先生があなたに手紙をあげたと言つたけどほんとかい。

昨日羅先生と徐先生が部屋にゐて話をしてゐたのさ。話してるところに僕がかけ込んで行つたら二人とも話をしなくなつた。

羅先生と徐先生は僕を見つめた。それから徐先生は僕の頭をなでた。徐先生は眼に涙をためてゐたよ。あんな大きくなつた人が、羞しくないのかなあ。あの人は先生じやないか、(ママ)徐先生が云つた。

『あんたは私の所に居たいのかい。それとも姉さんの所へ行きたいのかい?』

僕はわからないと言つた。僕はお父つあんと兄ちやんが歸つてくれさへすればいいんだと言つた。僕は泣きだした。

徐先生はためいきをついた。

ウンウンウンウン、(ママ)蜜蜂がうんとゐるな。

徐先生は僕の手をにぎつて言つた。

『あんたは私の部屋に住みなさい。いいでせう。』

そういつて徐先生はハンケチで眼の涙をふいた。徐先生の眼ははれてゐた。

徐先生は僕が泣きやめば話をしてきかせてやると言つた。此の話はほんとに面白かつたなあ。姉さんは知つてるかい。あのランプはいいなあ、あんなランプが僕等にあれば僕等は木の鬼に頭でつかちをやつつけさせてやるんだがなあ。

徐先生は僕と遊んでくれた。僕等にあのランプがあればいいんだがなあ、ランプがあればお父つあんも兄ちやんも歸つてこれる。木の鬼は趙雲より強いんだからな。

ウンウンウンウン。蜜蜂が又やつて來た。

お父つあんも兄ちやんも居ない。黑牛も王寅生も居ない。たくさんの人が居なくなつてしまつた。

もしランプがあればいいんだがなあ。僕はそんならもう泣かないんだ。

遊びに行かなくちや。もう書けません。さよなら。

狐塚牛太郎譯

注

（1）「全集の完結を迎えて」（『武田泰淳全集　第十巻』月報16　昭和四十八年三月　筑摩書房）

（2）前掲（1）

（3）昭和三十五年七、八月号「近代文學」

（4）拙稿「武田泰淳と「文化集團」（その一）」（「上田女子短期大学紀要」第二十二号　一九九九年三月）、「武田泰淳と「文化集團」（その二）」（「上田女子短期大学紀要」第二十五号　二〇〇一年十二月）を参照されたい。

〈以下別稿〉